

次の課題文を読んで、設問 A、B に答えなさい。解答は解答用紙の所定の欄に横書きで記入しなさい。

[課題文]

知 (knowing) をその働きの方向によって分類すれば、情報 (information) と反対の極をめざすのが、知恵 (wisdom) だと見ることができる。聖書の知恵、長老の知恵、おばあさんの生活の知恵という言い方が暗示するように、それは時間を超えた真実を総合的にとらえるものとして理解されている。知恵は深い意味で実用性を持つが、およそ新しさや多様性とは縁がなく、それ自体が内部から自己革新を起こす性質にも欠けている。知恵は永遠であり唯一であり、その内部にも多様化への余地を許さない統一性を保っている。そしてこのように比較すると、普通に知識 (knowledge) と呼ばれる種類の知は、構造と機能のどちらの面でも、この知恵と情報の中間にあると考えられるのである。

知識は断片的な情報に脈絡を与え、できるだけ広い知の統一性を求めるとともに、できるだけ永く持続するものにしようとする。その点では、明らかに情報よりは知恵の方向をめざしながら、しかし知識はその内部に多様な情報を組みこみ、全体としては分節性のある構造をつくりあげる。全体を区切る細部があって、そのあいだに順序配列のある統一をつくるのである。知識はたえず新しい情報を受け入れて自己革新に努め、同時に古い知識との連続性を維持しようとする。一方、内側にも外側にも複雑な脈絡を持つ知識は、情報よりも知恵よりもそれを理解するのに努力を必要とする。さらに実用性という点から見ても、知識はこの二つに比べて効用がわかりにくいのが特色だといえよう。

こうした知識がにわかに拡大したのが十八世紀であって、自然科学を中心に随所で神秘的な知恵や経験的な知恵を駆逐して行った。青年の学ぶ新しい学問のほうが、村の長老やおばあさんの言い伝えよりも尊重されるようになったのである。だがその反面、知識は最初からたえず情報に背後を脅かされ、体系的な統一性を試される宿命をおびていた。十八・九世紀は新発見の時代でもあって、理論的な知識はそれに合わせてたえず組み替えを求められたからであった。(中略)

これに加えて、ここでとくに注意しておかねばならないのは、二十世紀の大衆社会の反権威主義的な気風である。古い特権的知識人が死に絶え、いわゆるインテリゲンチヤも消滅するなかで、「啓蒙」という権威主義的な言葉も時代遅れになった。人びとは知的財産の平等な所有は求めながら、誰かに教えられ指導されることには潜在的な嫌悪を感じ始めた。象徴的な事件は七〇年代の学園紛争であって、反乱学生は大学の教授体制を否定する一方、「自主解放講座」の設立を企てた。結局この矛盾した運動は挫折したが、彼らの知にたいする矛盾した感情は後を曳^ひいているように見える。とりわけ実用性の乏しい教養的な知識について、人びとはその供給者に自己拡張の匂いを嗅ぎつけ、無意識の反感を覚える癖をつけたように見えるのである。

この矛盾した感情をまえにして、またしても有利なのが情報であることはいうまでもない。断片

的な情報は現実そのものの多面性に対応し、それを集めた個人よりも対象の現実には忠実であるように見える。じっさい情報は無署名で提供されることが多く、俗に言えば頭よりも「足で集めた」ように見える。知識に比べて情報には自己拡張の匂いが薄く、消費者の側から見て、教えられ指導されたという印象を受けることが少ない。これについては日常語の慣用が示唆的であって、知識はしばしば「授ける」ものであるのにたいして、情報はたんに「伝える」もの、ときには「さしあげる」とさえ言えるものなのである。

これにたいして、知識はその構造からして権威主義的に見える宿命を負っている。特権や制度による権威づけとは無関係に、それは本質的に情報を脈絡づけ、文脈のなかで意味づけようとする意志の力に支えられる。その意志の力は同時に説得しようとする情熱であり、自己の作業を正しいと信じる信念にほかならない。もはや自明の普遍的な価値観がなく、社会的使命感も相対化された現代にあって、自立で知識を統一しようとする意志はますます気負いがちになる。そうした気負った意志と信念が二十世紀の市場社会に現れたとき、それが大衆の嘲笑を浴びないまでも、冷淡な視線に迎えられるのは当然だといえよう。

実用的な価値に富み、しかも没権威に提供される情報はほとんど「もの」に似ており、容易に商品化されて普遍的な市場に乗る。株情報、グルメ情報、政治ニュース、風俗ニュースといったかたちで需要の範疇^{はんちゆう}化が容易であり、いいかえれば範疇ごとに需要をあらかじめ予測できる。娯楽が大衆の平均的な感情を類別し、それに合わせるかたちで需要予測を可能にしたのと同じである。また情報の原価はそれを収集し伝達する費用であり、相当程度に客観的に知ることができる。需要の大枠が決まり原価の積算法がわかっていれば、後は生産性と商品の細部の差別化だけが問題であり、情報産業はファッション産業など同様に市場の競争に臨めるわけである。

これにひきかえ、知識の生産は大部分が個人の内面の作業であり、マルクスの言う「労働力の再生産」という尺度のほかに、原価を決める基準がない。しかも（中略）知識の需要は平均化になじまず、一回ごとの供給によって逆に生みだされるという性質を持つ。いいかえれば、消費者は商品を買うまえに何を買いたいかを知らず、満足するまえに欲望を知らないということになる。この市場では消費にも供給にも賭けの要素が強くなるが、とりわけ供給者の困難は極大に近くなる。需要の方向を探るマーケティングも不可能であるし、生産性をあげる合理化ももっとも根本的な部分で意味をなさないからである。

さらに市場の価格決定は一種の大衆投票であるが、現実にはどの市場にも先導的消費者というものがあるが、その誘導が大きな貢献をしている。ファッション市場にはお洒落^{しゃれ}に敏感な若者集団があり、株式市場にはいうまでもなく仲買人や職業的投資家がいる。知識市場で昔その役割を負っていたのが、あのインテリゲンチヤと呼ばれる知識人であったが、それが消滅したことは知識の価格決定に問題を生んだ。彼らの第一の役割は啓蒙を叫んで知識の一般的需要を喚起したことであるが、これは歪み^{ゆが}も含んでいたし、消えたのは歴史の趨勢^{すうせい}としてやむをえない。しかし彼らは第二に個別の知識商品を選別し、一種のブランド商品すら選定する働きをしていたのであって、これが失われ

たのは大きな痛手であった。

(山崎正和著、『歴史の真実と政治の正義』中央公論新社2000年より抜粋。常用漢字表にない漢字には、一部ふりがなをつけた。)

(注) インテリゲンチヤ：知識階級

学園紛争：大学闘争

[設 問]

- A. 「大学での教育の目的は、知識を授けることである」という見解についてどのように考えますか。
課題文に基づき、知識の特徴を知恵および情報と比較して述べた上で、300字以内で書きなさい。
- B. 知識は人間だけによって創られていくのであろうか。あなたの考えを、それに至った理由を
付して300字以内で書きなさい。